お皿とナイフとフォークを並べる・・

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　深川　純一　氏

　２月26日はあの有名な二・二六事件の起きた日なのであります。昭和11年２月26日、陸軍の青年将校たちが反乱を起こしました。このとき反乱軍に殺された人に、時の教育総監でありました渡辺錠太郎大将がおられました。

　渡辺大将には、その当時小学生のお嬢さんがおられたのであります。渡辺和子さんといいます。いまたしか、ノートルダム清心学園の理事長をなさっていると思いますが、実はこの話は、この兵庫の今井鎮雄元ＲＩ理事のお導きによりまして、私はこの三十年来かかわってまいりました、この2680地区のライラにこの渡辺和子先生をお招きいたしました。若者たちにぜひ、渡辺先生の話を聞いてもらいたいとお招きしたのです。

　そのときにお聞きした話でありますが、反乱軍が渡辺邸に侵入してきたときに、渡辺大将はお嬢さんの渡辺和子先生と書斎におられたのであります。反乱軍が書斎に入ってきたときに、渡辺大将はとっさにお嬢さんを机の下に隠したのであります。そこへ反乱軍が入ってまいりまして、渡辺大将に43発の軽機関銃を撃ち込みました。そして銃剣でめった突きにして殺してしまったのであります。渡辺和子先生は１メートルとは離れていない目の前で、お父さまを殺されてしまったのであります。

　このことが動機になってカソリックの信仰に入られたのかと思っておりましたら、先生のお話を聞くと、そうではないとおっしゃっておられました。実は、カソリックでは30歳になるともう修道女にはなれないそうなんです。先生は29歳のぎりぎりの年まで外資設計の会社で部下を10人ほど持つエリートな立場におられたのであります。しかし、感ずるところがあって、29歳にしてカソリックの信仰の道に入られました。

　そして、修道女としてアメリカのボストンに渡られたときの話であります。暑い夏のある日、食堂で130人ぐらいの夕食のために、お皿とナイフとフォークをテーブルにセットする仕事をしておられたのであります。

　そのとき、先輩のシスターが渡辺先生に、「先生、あなたはいま何を考えていますか」とお尋ねになりました。先生は「何も考えていません」とお答えになったのであります。すると、その先輩のシスターは、「あなたは時間を無駄にしています」と言ったのであります。先生は自分の耳を疑ったそうであります。なぜ。

　その先輩は、同じお皿とナイフとフォークを並べるのであれば、やがてその席にお座りになる人のために、なぜ心のなかで「お幸せに」と祈りながら並べないのですか。何も考えないでただ漫然とお皿とナイフとフォークを並べるということは、時間を無駄にしていますよと諭されたわけであります。

　渡辺先生は、私はいままで、いかに効率的に仕事をするかということを教えられてきましたが、時間に愛を込める、仕事に愛を込めるということは初めて教わりましたと。時間に愛を込めること。お皿は同じ早さで、同じ姿で並んでいきます。しかし、目に見えない大切なものが込められるか込められないかによって、世の中は大きく変わるということ。

　それは一つには、私が「お幸せに」と祈っておいたお皿で召し上がった方は必ずお幸せになるという信仰であります。ただ、それよりも私にとって大切なことは、私が救われたということ。

　つまり、私にとってつまらない仕事はなくなったということ。お皿を並べるというつまらない仕事、雑用だと思っていた仕事が、実はそうではない。雑用というのは私が仕事を雑にしたときに雑用になるということを教えられました。だから、救われたのは私です。

　つまらないと思ってお皿を置く。「お幸せに」と祈ってお皿を置く。外から見た限りではまったく同じに見えます。かかった時間も変わりません。しかし、仕事の量は同じでも仕事の質が変わっている。ということは、その人自身が変わったということです。と、先生は述懐しておられました。

　お皿を並べるというつまらない行為に愛を込めるように、自分の仕事に愛を込める。私たちのすべての行動に愛を込めるということは、言い換えますとロータリーのいう倫理的な生活を営みなさいということであります。これは実は、人を育てるための基本前提なのであります。仕事に愛を込める、時間に愛を込める。そのことなくして倫理的な人間を育てることはできないと私は思うのであります。

　渡辺先生は、お皿を並べるという単純な行為に、幸せを祈るという目に見えない大切なものが込められるか、込められないかによって世の中は大きく変わると言われました。このように、心の問題を重視するのがロータリーの奉仕なのであります。

　したがって、渡辺先生の言葉はロータリーの奉仕の基本的なあり方を示しているわけであります。したがってロータリアンは、自分の企業経営についても心の問題を重視しなければならないわけであります。